ふるさとの誇り 116

～受け継がれる想い～
南アルプスの風土と伝統行事

沓沢道祖神場

大曽利道祖神場

【プロローグ】

風土という言葉をご存知でしょうか。一般的にその土地の気候や地形などを総称する言葉として使われますが、それらの変化にともなう人々の暮らしや文化などの違い、いわゆる土地柄を指し示す言葉としても用いられます。今回は1月に実施した芦安地区での小正月行事の調査内容を元に南アルプス市の風土と伝統行事についてお話します。

【風土の違いと文化の違い】

一月十四日の小正月の日(※1)、市内各地で道祖神場の飾りつけやどんど焼きが行われます。これらの風習は、どんど焼きの際に火を付けて焚き上げるものの種類や形、飾るものなどが同じ市内であっても地域ごとに違い、バリエーションに富んでいるのが特徴です。芦安地区で調査を行ったところ、現在も大曽利・小曽利・沓沢の三集落でどんど焼きの行事が続いており、それぞれに違った個性を持っていることが分かりました。

芦安ならではの特徴として、三つの集落ではいずれも道祖神に対し、周辺に自生する加工のしやすいヌルデの木で作った木製品を捧げる風習が挙げられますが、その内容は集落ごとに刀や弓に箸、オデク（オホンダレサマ）と呼ばれる人形、男性・女性のシンボルと様々です（図参照）。

また焚き上げられる素材にも特徴が現れています。平地の水田地帯では稲わらなどが多く用いられるのに対し、芦安地区を含む山間部では山の木々などが用いられる傾向があり、小曽利集落では主に竹を、より山あいの大曽利・沓沢集落では主に木材を使用しています。いずれも林業等を中心に、山とともに生きてきた芦安の風土が良く現れているといえるでしょう。

※1　近年では前週の土日に行う地区もあります。

芦安地区の中でも3集落で、それぞれに個性が見られます。

記憶は地域の宝物

調査風景：沓沢

弓矢・刀を作る：沓沢

刀を作る：小曽利

教育委員会文化財課では、市内の歴史や文化を再発見し後世へ伝えるために、山梨県立博物館で民俗を専門とする学芸員にご協力いただき、芦安地区集落支援員とともに芦安地区の小正月行事の調査を行いました。この調査によって、担い手が不足する深刻な状況の一方で、新たな担い手に伝統が受け継がれている状況や３地区それぞれの風土に根ざした個性も明らかとなりました。

ふるさと文化伝承館エントランス展

にしごおり、和菓子の世界

３月中頃一部展示変えします。村岡花子が通った麻布の菓子店の木型など新資料を公開します。

開催中～平成29年5月17日
９時30分～16時30分　木曜休館
TEL　055-282-7408

右頁上：沓沢の道祖神場。沓沢では地元の人から新たに移り住んだ人々に小正月行事の準備、マツリのやり方などが受け継がれている。
右頁下：大曽利道祖神に奉納された木製の捧げもの。願いが書かれた人形のオデクや魔除けの小刀、二膳の箸などが置かれている。オデクはすぐに各家に持ち帰られ、１年間各家を見守り、来年のどんど焼きで焼かれる。

【変わりゆく風土、受け継がれる想い】

かつて林業などが盛んだった芦安地区も現在では生業が観光業や土木業へと移り変わり、地区外に働きに出たり、地元を離れる人も多くなりました。人々の暮らしに寄り添う形で受け継がれてきた伝統行事の中には、担い手の減少や生活様式の変化により、衰退してしまったものも少なくありません。

その一方で、今回紹介した小正月行事のように今も大切に受け継がれている風習があります。沓沢のようにかつて二十数軒あった民家が三軒にまで減少し、伝統行事の継承が危ぶまれたものの、宿・ペンション経営者といった新しい住民が地域に加わり、重要な担い手として活躍している集落もあります。芦安の各道祖神場に掲げられた『子孫繁栄』『家内安全』といった言葉たち。今も昔もそしてこれからも変わらない、人々の純粋な願いなのかもしれませんね。

写真・文　文化財課